

日本語弁論基礎（1）講義メモ

スピーチ ①会議や会合、パーティーなどの場で短い話をするこ

②話をすること

弁論 聴衆の前で特定のテーマについての意見を述べること

スピーチパフォーマンス

語学の習得を目的とし、人々の前で話をしてみせること

ディベート 特定のルールのもとで2組が議論をして競うゲームのこと

討論 特定の問題について、それぞれが意見を述べ合うこと

演説 人々の前で自分の意見や主張を述べること

講演 聴衆の前で一定のテーマで話すこと

口頭発表 聴衆の前で話しことばで事実や意見を知らせること

スピーチコンテスト

A. スピーチパフォーマンスのコンテスト

ボディランゲージ（身振り・手振り）などを含めたトータルの表現力を競う
内容（コンテンツ）よりも表現の仕方（パフォーマンス）が重視される
動きや外見（容姿や服装）なども審査に反映される

B. 弁論のコンテスト

テーマに沿って述べた意見の内容など言語的な表現力を競う
表現の仕方（パフォーマンス）よりも内容（コンテンツ）が重視される
動きや外見（容姿や服装）などは審査に反映されない

言語・準言語・非言語

初対面の人を判断・評価する基準=メラービアンの法則（アメリカでの研究）

非言語：準言語：言語=55：38：7

ジェスチャーとポライトネス

日本語の発話では、ジェスチャー（身振り・手振り）の使用は、丁寧でない口頭言語表現を生じる（レス・ポライト）。日本語の発話では、ジェスチャーは抑制性に用いるのがよい。

スピーチパフォーマンスは、もともと英語学習の方法のひとつなので、日本語のスピーチパフォーマンスに抑制的でないジェスチャーを求めるのは疑問である。また、日本語の場合、話の内容に集中するために目をつぶって話を聞く習慣を持つ人（年配の男性に多い）もあるので、ジェスチャーそのものが意味を持たないことも少なくない。

修辞（レトリック）

直接民主制など自由な意見の表出が許される場では、修辞は<目的>と<手段>の関係で捉えられる実用的なスキルである。しかし、（絶対）君主制のもとでは、レトリックは<目的>と<手段>の関係ではなくなり、<形式>と<内容>の関係で捉えられ、実用性よりも美的な価値を優先するようになる。（ツヴェタン・トドロフによる）

弁論における修辞

本来の意味での修辞（レトリック）は、身体的なパフォーマンスを含む、広い意味での表現手段を体系的に分類・整理したものである。現代の弁論における修辞は、身体的なパフォーマンスよりも言語表現上の手段が重要である。また、弁論では美的な価値が評価されるわけではないので、<目的>と<手段>の関係で捉えられるような実用的な修辞が重要である（例：発想、構成、比喩、呼びかけ表現、フィラーの用法など）。

スピーチのテーマ

a.社会的・文化的なテーマ

常識・知識・教養・分析能力を評価する

「答え」も考え方とともに重要である

結論（「答え」）を明確にし、論理的に整然と話すのがよい

b.個人的なテーマ

個人の価値観や人間性を評価する

「答え」よりも考え方方が重視される

自分の体験などの具体例を入れ、親しみやすく話すのがよい

スピーチの構成の基本

2段構成：意見・事実型／事実・意見型

3段構成：意見・事実・意見型

a.社会的・文化的なテーマ

3段構成、または、2段構成

b.個人的なテーマ

2段構成、または、3段構成

真面目さと不真面目さ

弁論にユーモアが含まれるのは悪いことではない。しかし、程度によってはふざけている・不真面目であるとみなされる場合もある。弁論を含むスピーチ一般で最も難しいのは、笑いをとりながら自分の考えを伝えることである。